

たぐみ

CraftsmanShip

特集 民藝運動の作家と職人の仕事展
 特集 たぐみ・アーカイブス

第40号

パリでの日本文化紹介展 三つ

京都における禅と美術

今年が日仏交流百五十年ということ
 で、いまフランスでは日本文化がブー
 ムだという。私がパリにいた十月中旬
 にも注目すべき展覧会が幾つか開かれ
 ていた。ひとつは「京都における禅と
 美術」展で、十月十六日からプチ・パ
 レ美術館で開かれた。企画の中心と
 なったシャザル館長は、『日本文化に
 存在する絵画、書、工藝、庭園などさ
 まざまな様式の美。』禅に代表され
 る精神性、空間全体との調和など日本
 美術の奥深さは、西洋文化にはない美
 学だ』と、ある冊子に語っている。展
 示品は相国寺、銀閣寺、金閣寺の寺宝
 から。このほか相国寺の有馬頼底管長
 による「禅」の講話や、千玄室宗匠に
 よる献茶、また華道、香道のワーク
 ショップなどが演出され好評だったよ
 うだ。

日本における民藝の精神

これとは別にケ・ブランリ美術館で

は、柳宗悦の蒐集を中心とした標題の
 展覧会が九月三十日から開催されて
 いる。日本民藝館の所蔵品、柳宗理の
 スタジオからの出品などで、ほかに柳
 たちと親交のあったブルーノ・タウト
 やシャルロット・ペリアンのデザイン
 作品にイサム・ノグチの照明具などが
 展示されている。わが国の生活工藝と
 西洋近代のデザインとの相互作用や交
 流などがテーマの一つで、総合企画や
 作品の選択など、ケ・ブランリ美術館
 のヴィアッテ氏の主導によったとい
 う。

この美術館はシラク前大統領の肝煎
 りで二年前に開館した、アジア、アフ
 リカの伝統文化を軸とする館である。
 とくに人類の永い歴史の中で、少数民
 族や部族も含め、それぞれの固有の生
 活文化が互いに交流しながらどう形成
 されてきたのか、また西欧の近代藝術
 に与えた影響などを、先入観なしに発
 見しようとする視点が面白い。もう一
 つの企画展「イヌイットの彫刻」
 も秀逸であった。

柚木沙弥郎・浮遊する領土

もうひとつ特筆したい企画展は、ヨーロッパ・ギャラリーで十月三日から開催されている「柚木沙弥郎・浮遊する領土」展である。場所はパリ中心部、サンジェルマン・デ・プレ教会の近くの画廊の多い地域にある。

柚木氏は染色工藝家として知られるが、近年自由な境地を得て、混沌とす



「柚木沙弥郎・浮遊する領土」展会場風景 2点

る現代における新しい創造を生みつつあるように見える。今展では染布が主たる展示であるが、それらをテキスト・イル・デザインとしてみるのではなく、コンテンポラリーな造形表現としてみようとする。

私は柚木氏の原点に、芸術家であった祖父や父から受けた資質の外に、同代的なもの、とくにエコール・ド・パリやロシア・アバンギャルドを想像するのだが、それはそれまでの様式美に対して、より民衆的で平易な表現を感じさせるからである。

柚木に傾倒しパリでの作品紹介に力を尽くした、ポンピドゥー美術館のマックス・A・ラルミナ氏は柚木の作品を評して、嵐の時の荒れ狂う海に船乗りたちが放つ海錨にたとえる。この海錨は強い風を受けつつも船の針路を保つ。それが柚木が造形藝術という冒険に乗り出して以来固守してきた行動理念ではないだろうか、と記している。

柳宗悦の「工藝の道」に教えを受け、染色の人間国宝芹沢銈介に師事し、時代の子として明快で自由な表現を旨とした柚木の仕事は、これからも私たちを楽しませ生きることの意味を問いつけ続けることだろう。

ブチ・パレ美術館における日本の伝統文化の展示、ケ・ブランリ美術館における民藝のエスプリ展、そしてヨーロッパ・ギャラリーでの柚木沙弥郎展、いずれも日本文化のエッセンスを示し、世界に対するメッセージとしても意義のあるものであったと思う。

(志賀直邦)



版画「会津の冬」(齊藤清)



点文ぐい呑、えび文筆筒、魚文湯呑(金城次郎)

たくみ特別展

民藝運動の作家と職人の仕事展

会期 平成二十年十一月二十九日(土)～十二月八日(月)

十一月三十日(日)、十二月七日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(十一月三十日(日)、十二月七日(日)、八日(月)は十七時半まで)

■ 出品品目 ■

陶磁 会津、本郷、益子、瀬戸、備前、砥部、伊万里、沖繩壺屋、ほか

染織 手織木綿着尺、広巾布、型染布、古裂、ほか

雑工 樺手付盆、吹ガラス器、信州木工掛鏡、わら細工、ほか

海外 スペイン陶器、メキシコ陶器、ガラス絵、インド鉄器、中国魚籠、ほか

書籍 工藝関連図書、図録、「民藝」、「民芸手帖」、ほか

■ 出品作家 ■

河井寛次郎、濱田庄司、富本憲吉、芹沢銈介、棟方志功、B・リーチ、齊藤 清、金城次郎、河井武一、船木研児、武内晴二郎、合田好道、佐久間藤太郎、ほか



キリム敷物 (トルコ)



鉄絵扁壺 (合田好道)



渡名喜瓶、草文蓋物 (沖縄壺屋焼)



色絵中皿三枚組 (合田好道)



鉛釉水指 (会津宗像窯)



倭絵「山水図」(棟方志功)



柿釉九寸皿(濱田庄司)



ガラス絵「異国風景」(長崎)



絵替り盃五客組(河井寛次郎、濱田庄司)



飾皿(スペイン)



手吹ガラス 水さし(藤田喬平)

たくみ・アーカイブス について

志賀 直邦

たくみが、柳宗悦、濱田庄司、吉田璋也たち民藝運動の中心メンバーの方々の発起と肝煎りで東京銀座の地に誕生したのは、昭和八年(一九三三)十二月十六日であった。間もなく十七六年目を迎えることとなる。

人間でいえば日本人の平均寿命に近いが、これまでの七十五年を省みれば意義深くも波乱に満ちた歳月であったと思う。このことは民藝の世界に身を投じた作家、工人、販売店や協力者として同じであったろう。

いま柳宗悦の思想や民藝の美に関心を寄せる研究者は多いが、民藝運動はそもそも人びとの生産活動と日常生活に根ざした実践的な活動である。とくに初期や戦後の復興期においては、柳たちは調査、蒐集、啓蒙、普及のすべての局面で若い同人の先頭に立ち、あ

るいは行動を共にした。しかしそれら各地の同人たちも今は亡い。

今日、私たちは先人の足跡から何を学び、受け継いでいけばよいのか。学究の徒は知らず、私たち現場に立つ生活者、生産者たちは、同じ文献資料でも実感あふれた体験的な文章から学ぶことが多い。そういった意味でいえば戦後の復興期に、「工藝」、「月刊民藝」に代わって民藝協会の情報発信の冊子として一定の役割を果たした「民藝通信」、「月刊たくみ」も、このまま記憶の彼方に押しやるわけには行かないと思う。

本稿の表題としたアーカイブスとは、記録保存とか資料とかいう意味だそうだが、さまざまな意味で資料や話題として貴重なもの、忘れ去るには惜しい文章を「たくみ・アーカイブス」シリーズとして紹介したいと考えたのである。

執筆者も当時一流の人が多く、文章にも時代相が活写されて興味尽きない

ものがある。今までも旧稿の紹介は行ってきたが、これからも編集のテーマによって原稿の選択はアトランダムなものとなる。ご了承をいただきたい。

今号の「外国人と日本の民芸品」(「月刊たくみ十三号」昭和二十九年一月十五日刊)の執筆者大屋敦氏は、その当時住友ベークライト株式会社社長であると共に当社たくみの取締役役員もつとめて頂いていた。

ところで柳宗悦全集の書簡集(第二十一巻下)の三十年春から三十一年春にかけて、たくみに関する吉田璋也宛の書簡が何通か掲載されている。この内容についてはいずれ機会を見て明らかにしたいが、この中に大原総一郎や濱田、柳悦孝、村岡景夫らとならんで大屋敦の名が何回か出てくる。具体的にはたくみの財務状況と社長人事にかんしての相談だが、大屋氏が柳先生からいかに信頼されていたかがわかる。その後、三十三年に氏は日本銀行政策委員に任命され、民間のすべての

職を辞されるまで、たくみの会長として役員会に出席いただいた。

参考までに昭和三十一年（一九五六）五月付のたくみ事業経歴書から、その当時のたくみ役員名簿を記そう。

取締役会長	大屋 敦	同	式場隆三郎 （東京タイムス社社長）
（住友ベークライト会長）		同	吉田 璋也 （吉田病院院長）
代表取締役社長	神田 勇吉	同	柳 宗悦 （日本民藝館館長）
（小堺薬品産業社長）		同	濱田 庄司
同 常務	山本 正三	同	監査役 河井寛次郎
取締役	柏 正巳	同	大原総一郎 （倉敷レイヨン社長）
（東京倉庫社長）		同	村岡 景夫 （女子美大教授）
同	藤山愛一郎	同	浅沼 喜美 （日本海新聞社）
（日本商工会議所会頭）			
同	武田 正泰		
（三井倉庫社長）			
同	橋本 保		
（東亜火災保険専務）			
同	松方 三郎		
（共同通信社専務理事）			
同	中田 勇吉		
（北陸銀行頭取）			

外国人と日本の民芸品

大屋 敦

たくみ・アーカイブス(二)

これらの方々の多くが日本民藝館の理

は、原始生活をした祖先からの遺伝に

事や協会役員を兼ねていたこともあって、たくみの役員会は柳館長、濱田館長の時代を通じて、いつも民藝館か倉敷レイヨンの会議室で行われていたことも記しておこう。

たくみ・アーカイブス(二)「コレクシヨン考」の執筆者松方三郎氏は、一般には日本山岳会の会長として、また西洋近代美術の松方コレクシヨンの継承者として知られていたが、本業は共同通信社の専務理事であった。民藝の関係では日本民藝館理事、協会会長、たくみ取締役を永くつとめられた。大屋、松方両氏に限らず柳先生たちと親交のあつた財界人、経営者の方たちはいづれも真の教養人であつた。

稚拙なものに対する私どもの執着は、原始生活をした祖先からの遺伝によるものか、あるいは余り自然美に囲まれて育つたので人工に過ぎたものに馴染めぬためなのか、巧まぬものに対する感覚の鋭さは日本人が世界随一である。庭石や石畳の美しさなどは、東洋美術に相当関心を持つ西洋人でもな

かなかつかめぬようである。

アメリカにもドイツにも動物園や公園などに純日本風の庭園を造っている所もあるが、そこに並べられた庭石を見ると誠に興ざめである。コンクリートの塊をぶざまに積み重ねたとしか見えない。

ところが近ごろこれらの国の人々の、日本の民芸品に対する異常の関心はどうしたことだろうか。今春アメリカでも指折りの財産家であろうと思われる夫人(ロックフェラー夫人)が来朝したとき、外国人には豪華なご馳走と高価な贈り物をしないことを昔からの持論としている私が、たくみで求めた三、四のささやかな品々を土産として贈呈したところ、ニューヨークではこんな趣味の高い日本のものを見ることのできないと文字通り驚喜してくれた。

これらは結局見慣れぬものに寄せる好奇心からであったに過ぎぬものであろうか。彼の地もスウェーデンやイタ

リアから来る手芸品をはなはだ高く評価しておると仄聞しておる私には、巧まぬものに対する愛情は文化のすすむに伴い、益々深くなるものと思われてならないのである。西洋人でも例外ではありえまい。

日本民族の自立に輸出が必要であることは誰でも知っておることであるが、資源が貧弱で鉄や石炭の法外に高価の日本では、重化学工業製品の輸出も自ずから制限されるし、昔華やかであった繊維製品も相手がだんだん買わぬようになつた今日では、その輸出の将来は悲観的である。この意味において海外先進国に対する日本の民芸品や地方特産品の輸出も決して軽視してはなら

たくみ・アーカイブス(二)

コレクシヨン考

松方 三郎

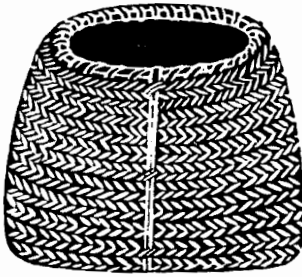
民芸品の私のコレクシヨンについて何か書けとの注文だが、私はそんなコ

ない。努力と時をかければ重要輸出品となる見込みは十分あると思われる。これにより農家に職を与え外貨を稼ぎ日本の良さを海外に知らしめることが出来れば正に一石二鳥であろう。

たくみの役員に高名の現役財界人が多数名を列することになつたのは、世界市場への日本民芸品の進出を狙っていると見られるが、その達成には、先ず以て用途とデザインに工夫を凝らすことと、手工芸の好さを傷つけぬ範囲において量産を指導することが肝要であろう。

(月刊たくみ十三号・昭和二十九年一月発行)より。筆者は当時、住友ベークライト会長、たくみ取締役会長)

レクシヨンをもつていない。たくさんというほどではなくとも、普通の家庭よりも比較的たくさんあるものがありとすれば、米沢の竹籠くらいのものだ。あの籠は本来何のためのものかは知らないが、私の家では紙くす籠に



山形米沢の竹籠「はけご」
(絵 芹沢銈介)

使っている。正確に言えば、私は紙くず籠に使うつもりで買っているということになる。

ところがそれがいつの間にか、子供の学校の読本や道具入れになったり、穴の開いた靴下の貯蔵所になったり、猫の寝室になったり、いくら買って帰っても、どこかに消えてしまう。大抵紙くず籠などというものは、郵便箱のように一ヶ所に固定しておくことのできないものだから、必要な時、必要な所がないのが普通だが、そんなところから、三日に一度くらい、私は、新

しい竹籠を買ってくるぞと、女房をおどかすのである。

ところでコレクシオンという言葉は何となく日々の用途以上のものを集めている場合をいうように思うのだが、もしそれが正しいとすれば、民芸品のコレクシオンという表現は何か矛盾したものを感じさせる。

何も日々の用途を、台所や食卓で使うものと限る必要はない。壁にかけてたり、棚へのせたりしてたのしんだところがかまわない。しかしそれにしても、一つの家、一人の人間の生涯で、そんな意味で直接役に立つものは決して多くはないし、とうていコレクシオンと呼ぶほどの規模にはならない。

これが民藝館のようなところになれば、目的がまるで違うのだから問題はおのずから別だが、個人の場合、民芸品の愛好者は、民芸品を何か直接の日々の生活の上で活かしている人のことをいうのだから、これがコレクターになった途端に若干の質的变化を

起こしているのである。私はあくまでも愛好者で利用者の立場をとっているから、最初から不要のものを—如何に美しいといっても—ただ集めて持つていようとは考えない。

ただし、何が必需品で何が不要品かということは、人によって見方が違うから、実際にはこの問題はいつもきれいに割り切れるとは限らない。たとえば、小鹿田のかめをかかえて帰る。世の中の女房はまた人間のための空間がそれだけ狭められたと脅威を感じるだろうし、買った当人は、そのかめの美しさは二尺立方の空間を犠牲にするに十分値すると考えるであろう。ここでは確かに一つの食い違いがある。しかし小鹿田のかめは正月の餅をつけるのに動員されることもあるし、玄関で傘立ての役目もすることもある。

(月刊たくみ第二十号・昭和二十九年八月発行)より。筆者は当時、共同通信社専務理事、たくみ取締役)

エッセイ

食べ物三題(一) 半助

吉本 力

住吉大社の前の道を、車を運転している時、

「半助あります」

という札がぶらさがっているのが目に入った。

後続の車があり、スピードを落とすことも停めることも出来ず、そのまま通り過ぎてしまった。話には聞いていたが、これまでに一度もそのような札を見たことがなかったし、住吉大社の前をこれまで何度か通ったけれども、一度もそのような札がぶら下がっていただけではない。ひよっとするとまぼろしであったかも知れない。

「半助」というのは、辞書にあるような「一人前でない人間」「うすばか」「半人前の男」という意味ではない。

うなぎ屋では、うな重、うな丼、蒲

焼きなどの料理を出したあと、落とし頭が残る。その頭をまとめて捨ててしまおうかという時、そうはしない。店の軒先に「半助あります」という札を出しておく時、近隣の人がそれを見て、うなぎの頭をもらいにくる。これを豆腐と一緒に煮く。(本来煮ると炊くとは違うのだが、大阪の人間は煮る意味でたくというのでこの漢字をあてることにする)これが大変うまい。

不幸にして、私はうなぎ屋の近くに住んだことがなく、このような光景を見たことがない。話はすべて父から聞いて知ったことだ。だから「半助あります」という札をはじめ見て、父の話が「本当だったのか」と、驚いた。

ここまでを読むと、「大阪の人間はケチだね」と思われるかもしれない。しかし、少しお考え頂きたい。日本人には美しい習慣がある。食事の前に「いただきます」という美しい言葉を発する。

私たちが口に運ぶ食べ物は、すべてこの天地の中で生命を育んできたものだ。私たちの生命をつなぐために、その生命を奪って、私たちの食物として頂くのだから「いただきます」と感謝の心を表すのだ。

そう考えれば、食べることでできるものは、余すところなく食べ、利用できるところはすべて利用するのは、当然のことであって、食べ物を粗末にしたり無駄にしたりすることは、生命を失ったものに対して、どれほど相済みぬことであろうか。この五十年程の間に経済的には豊かになったために、ゼいたくをしたり、物を粗末にすることで、優越感を得ようとする馬鹿な成金根性の者が増えた。本当に苦勞して鍛え上げてきた人は、そのような馬鹿なことではない。

半助をもらって帰って、値段の安い豆腐と一緒に煮いて、格別うまい料理の一品を作り上げた、先人の知恵はた



信楽焼蓋付土鍋 (径24cm) 17,325円



丸柱焼行平鍋 (中) 1,890円 (大) 2,100円

いしたものではありませんか。

感謝もて物を大切に生かし使う
これが節約ケチと異なると

『土』第八歌集より

今度、「半助あります」の札を見つ
けたら、車を停めて、半助をもらって

たくみ歳時記 冬の鍋いろいろ

帰ることにしたい。女房には「変なもの
をもらって帰ってきて：：」と小言
を言われるかもしれないが、もしそう
なったら、まあいいや。そんな時には
自分で豆腐を買ってきて煮くことに
しようーと。

(ささらさや主宰・大阪市)

信楽焼の蓋付土鍋

やきものの郷・信楽は上質な土鍋の
産地として料理人に知られています。
耐熱性、堅牢度にすぐれ高熱で調理す
るスツポン料理など、信楽の土鍋抜き
では語れないでしょう。

伊賀丸柱焼の行平鍋

手の付いた土鍋を行平鍋といいま
す。昔から庶民の暮らしには欠かせない
もので、小型の品は粥鍋としておなじ
みですが、最近ではミルク沸しとしても
広く使われています。

韓国の石鍋

石焼ビビンバや各種のチゲなど、韓
国料理では石鍋が必需品です。しかし
韓国でも近年良い石材が手に入らない
由、この品はおすすめの逸品です。

北朝鮮の蓋付石鍋

北朝鮮では北部の七宝山近くで産出
する薬石が成分にすぐれ、長寿に最適
といわれます。現在の政情からして、
もう二度と手に入らない品です。



手付銅鍋 (径16.5cm) 14,175円

銅の手付鍋
銅鍋は、銅の板を何回も焼きなまし、金槌で叩き締めて、ていねいに形を整えて作ります。熱伝導が良く、食材の持ち味を損なわずに調理できるので専門家に喜ばれます。京都の北村さんの作です。



韓国の石鍋 (径27cm) 15,750円



北朝鮮の蓋付石鍋 (径21cm) 20,475円

あとがき

たくみをひいきにして下さった経済人で、今は故人だが忘れられない方の一人が井上作松氏である。山形県の新庄信用金庫の理事長を永くつとめられ、上京の度にたくみに立ち寄られた。

新庄は、昭和十三年頃から五年間、農林省の雪害調査所と日本民藝協会が協力して、東北地方農村の副業振興に当った拠点となった所である。

柳たちによる製作指導と販売協力は農村の作り手たちに大きな励ましと自信を与え、戦後における東北農村の手仕事復興の礎ともなった。

新庄信用金庫の理事長室には、かつて所狭しと近在農村の籠や雪杵や東山焼の陶器などが置かれ、来客に手仕事の民藝品のすばらしさを語りかけていた。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八丁四一

二 発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)